



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Studies on the Role of Self-esteem and Self-compassion in Suicide Prevention [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	NGUYEN, Tan Dat
Description	配架番号 : 2883
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(医学)
Dissertation Number	甲第16202号
Issue Date	2024-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94063
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	NGUYEN_Tan_Dat_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（医 学） 氏 名 NGUYEN Tan Dat

主査 教授 玉腰 暁子
審査担当者 副査 教授 古元 重和
副査 教授 和田 剛志

学 位 論 文 題 名

Studies on the Role of Self-esteem and Self-compassion in Suicide Prevention
(自殺予防における自尊感情とセルフコンパッションの役割に関する研究)

この論文の目的は、自殺予防における自尊感情とセルフコンパッションの役割を検討し、適切な介入プログラムを開発することである。第1章では、既存論文のシステマティックなメタ解析により、自尊感情の向上を含む介入が自殺念慮の減少に寄与する可能性が示唆された。第2章では、自尊感情が心理的苦痛および絶望感を介して自殺念慮に影響を与える媒介効果とその程度がコロナ前とコロナ流行下で異なることが示された。第3章では、自尊感情とセルフコンパッションに基づく心理教育介入プログラムが、自殺リスクを抱える大学生に対して高い実行可能性と受容性を持つことが示され、予備的な成果であるものの今後につながるものと考えられた。

副査の和田剛志教授から、コロナ前後で日本の大学生の自殺念慮の増減傾向と各時期の背景要因につき問われ、申請者は、本研究では一部の先行研究と同様に自殺念慮を持つものが増加したと報告されている一方で、他の研究ではコロナ中に自殺念慮を持つものが減少したとされているとも述べた。和田教授からさらに、第2章でコロナ前とコロナ流行下で大学生の自殺念慮に対する心理的苦痛の重みが異なることが示されたことから、第3章で得られた心理教育介入プログラムのコロナ流行期以外での有意性について質問があり、申請者は現在の結果からだけでは明確ではないと回答した。

次に、副査の古元重和教授から、介入研究に参加した被験者の中で服薬している者について質問があった。申請者は薬が研究結果に影響を与えた可能性があるものの、今回はパイロットスタディであり、交絡変数を制御できなかった。しかし、今後の介入研究では服薬している参加者と服薬していない参加者を比較する形でコントロールすることが重要であると回答した。続いて、セルフコンパッションの概念について再度説明してほしいとの質

問があり、申請者はセルフコンパッションは自尊感情に比べて比較的新しい概念であり、自尊感情が自分のポジティブな側面に焦点を当てるのに対し、セルフコンパッションは自分自身の良い側面と悪い側面の両方を受け入れることに注目していると回答した。さらに、自殺予防としては、自殺念慮がある対象者への介入だけでなく、より広く一般の学生に対する一次予防にも焦点を当てることが重要ではないかとの指摘があり、申請者は介入研究の結果、セルフコンパッションが自尊感情得点に比べて大きな効果量を示したため、今回の介入プログラムを用いてセルフコンパッションの向上を介入の目標にすることが可能であると回答した。

最後に、主査の玉腰暁子教授から、第2章の媒介分析研究で定義されたモデルの適切性について質問があり、申請者は自殺の逃避理論に基づいて、自尊感情、心理的苦痛、絶望感、自殺念慮の順で選んだと回答した。また、他の要因やその順序も重要であることに同意した。次に、各章で異なる理論的枠組み、すなわち第2章では自殺の逃避理論、第3章では自殺の対人関係理論を選び検討した理由について質問があり、申請者は自殺の対人関係理論がより介入プログラムに適していると考えて、この理論に基づき介入プログラムの内容を作成したと回答した。一方で、第2章と第3章の理論が統一される方が望ましいことも認めた。さらに、保健センターを受診した学生を対象としているが、どのような経緯で受診した学生なのか問われ、研究に関するパンフレットを作成するとともに、保健センターの医師に協力を依頼して、保健センターを訪れた大学生、大学院生を募集したと回答した。

この論文は、自殺予防における自尊感情とセルフコンパッションの重要性を示すとともに、開発された心理教育プログラムについては実行可能性、受容性及び有効性が認められたことから、今後は無作為化比較試験を用いた介入研究の実施が期待される。

審査委員一同は、これらの成果を高く評価し、大学院課程における研鑽や取得単位なども併せ、申請者が博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと判定した。